

入学前算数テストと希望制習熟度別授業で下位層をフォロー

兵庫県 尼崎市立園田中学校

尼崎市立園田中学校の特徴は、中学校入口段階のさまざまな取り組みだ。学力下位層を把握するために「入学前算数テスト」を実施し、1年生から希望制の習熟度別授業を行う。学びに向かうための環境を早期に整え、学力差の拡大を防いでいる。

課題

- ・小学校段階でのつまずきを抱えたまま入学してくる生徒がいる
- ・生徒を落ち着かせる「分かる授業」づくり

実践

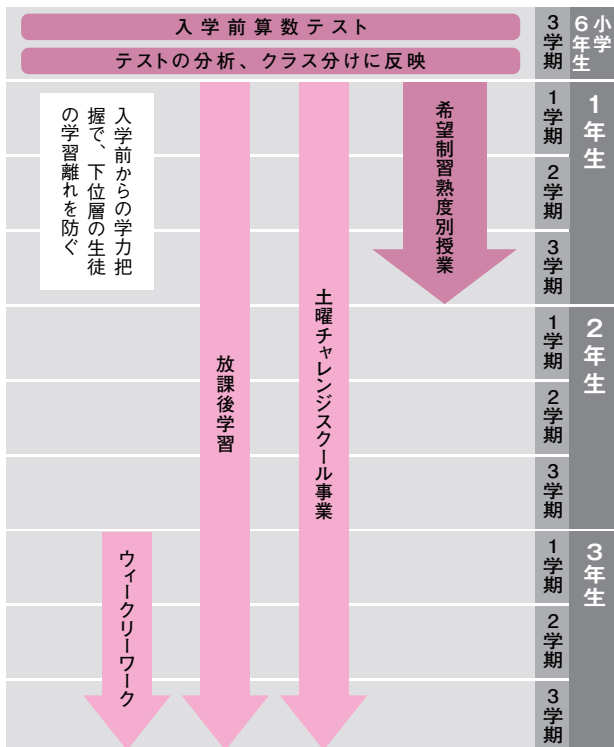
1 「入学前算数テスト」で、入学者の学力を把握

- ・校区内の小学6年生に、独自に作成した「入学前算数テスト」を行う
- ・結果は学校全体で共有し、クラス分けや授業の運営に活用する

2 1年生の数学で希望制習熟度別授業を実施

- ・教科書をじっくり理解、定着させる「じっくりコース」と、さまざまな問題に取り組む「充実コース」を設ける
- ・コースの選択は生徒の自主性を尊重し、学習意欲の喚起を図る

3年間の指導の流れ



School Data

◎1947（昭和22）年、園田地区唯一の中学校として開校。地域は、厳しくも温かく学校を支える。2008年度から「基礎基本を定着させ、考える力を育てる」をテーマに研究を開始。授業の充実と家庭学習の定着を図り、学力向上を目指す。



校長◎大龍雅子先生

生徒数◎795人 学級数◎23学級（うち特別支援学級3）

所在地◎〒661-0982 兵庫県尼崎市食満1-1-1

TEL◎06-6491-0775

URL◎<http://www.ama-net.ed.jp/school/j20/>

「学力保障」のために、移行期間の今できること

第1回

学力下位層を伸ばす3か年のストーリー

中学校入学前から 学力下位層のつまずきを把握

尼崎市北東部に位置する尼崎市立園田中学校の校区は、田園地帯が広がる落ち着いた環境だ。昔から暮らしている住民も多く、保護者も学校に協力的だという。

しかし、数年前まで学校は生徒指導上、困難な状況にあった。生徒、教師共に落ち着かない状態が続き、いつしか学力調査の結果も市の平均を下回っていた。

大龍雅子校長が同校に赴任した2007年度は、ようやく学校が落ち着き始めた時期であった。「研究を始めるには、時期がまだ早いのでは」という意見もあったが、大龍校長は、あえて「基礎基本を定着させ、考える力を育てる」をテーマに研究を始めた。

「まずは生徒指導をしつかりすべきでは」という声もありましたが、授業が分からないからこそ生徒が落ち着かないという面もあります。分かる授業をすれば、子どもたちはついてきてくれる。そうすれば学校も落ち着くはずだと先生方に理解を求め、研究を始めました（大龍校長）

そうした同校の取り組みの特徴は、「入学前および1年次の重視」である。まず、校区内の小学校3校と協力し、6年生全員を対象に、同校が独自に作問した「入学前算数テスト」を行う（P.14）。学力下位層の早期把握

が目的で、結果は学校全体で共有し、入学後のクラス分けや授業の運営に利用する。研究主任の伊藤美幸先生は、その効果を次のように語る。

「入学前に『この生徒は、ここでつまずいている』と把握しておくことで、入学後の授業がスムーズに進められます。また、入学前算数テストを続けるうちに、『分数』や『異なる2量の割合』など、多くの生徒がつまずきやすい単元が見えてきました。現在は、中学校でそれらの単元を授業で復習する機会を設けていますが、小学校でも力を注いでもらっています」

入学前の取り組みは、小・中学校の円滑な連携が不可欠だ。大龍校長は普段から小学校に足を運び、同校が目指す教育を説明し、理解と相互協力を呼び掛けている。

希望制習熟度別授業で 学びへの前向きな姿勢を育てる

1年生の数学では「希望制習熟度別授業」も行い（*1）、学力差の拡大を出来るだけ早期に防ごうとしている。

同校では、以前、クラスを単純に半数に分けて、習熟度によらない通常の少人数指導を行っていた。しかし、学力向上には効果があまり見られなかったため、08年度からは習熟度別のクラス分けを行い、教科を数学の1教科に絞ると共に、実施学年を1年生とした。

教科書をじっくり理解・定着させる「じっくりコース」と、教科書のほか、さまざまな問題に取り組む「充実コース」の2コースを設定し、生徒本人に選ばせる習熟度別授業とした（P.15）。

学力に応じた授業により、「授業が理解できるようになった」と感じる生徒が多くなっているという。また、授業が分からない場合でも、教師に質問をする生徒の姿が多く見られるようになった。

こうして、各種の取り組みを整備することによって、生徒の学力は上向いてきた。その結果、尼崎市が実施した09年度の「学力・生活実態調査」では、市平均を上回る成果を挙げた。

「現在の子どもたちの姿は、先生方の頑張りの成果です。当初は、研究に対するベクトルがなかなかそろわない時もありましたが、変わる生徒の姿を見て、学校が一丸となって学習に臨む雰囲気が出来てきたと思います」（大龍校長）



尼崎市立園田中学校
研究主任 伊藤美幸 Ito Misaki

研究主任。3学年担任。数学科担当。数学は中学に上がって最もつまずきやすい科目。苦手を意識を克服させたい」



尼崎市立園田中学校校長
大龍雅子 Dairyu Masako

「地域の人に愛され支えられ、地域とともに歩む学校づくりを目指す」

*プロフィールは取材時(2010年3月)のものです

*1 2010年度より3年生の数学でも実施

1 「入学前算数テスト」で小学校段階のつまずきを早期把握

■小学校段階での「入学前算数テスト」

同校の低位層への手立てでは、1年生が入学する前から始まる。校区内の小学校3校の6年生全員を対象に、同校の教師が独自に作成した算数テストを実施しているのだ(図)。

算数1教科としたのは、習熟の差が出やすいことに加え、小学校側の負担を減らすため。毎年1月、同校が人数分の問題用紙を各校に持参して受験を依頼。小学校は3月までにテストを行い、回収した答案を中学校に提出する。採点は中学校が行い、結果を参考に新入生の学級を編成することで、特定のクラスに下位層が集まらないようにしている。また、春休みに小学校別に誤答分析・考察を行い、4月初旬には各校にその結果を伝えている。テストは全23問で、あえて基礎的な問題ばかりを出題する。九九、小数計算、分数計算、図形の面積などの単元に対応し、算数のどの段階でつまずいているのかが明確になるように配慮している。

『「できる子」にとっては簡単に100点が取れるテストですが、テストの目的は手厚い支援が必要な生徒の把握と、その生徒が小学校段階のどこでつまずき、学習を放棄してし

まったかを理解することです」(伊藤先生)

毎年テストを続けるうちに、つまずきの傾向が見えてきた。「分数」「異なる2量の割合」の誤答率が高かったのだ。そこで、3学年を通して分数週間(6月)、割合週間(11月)を設定。練習プリント3枚を復習したら、最後に3学年共通のテストを実施して定着度を測り、今後の学習を促す。

入学前算数テストによって生徒の苦手な箇所が把握できるので、授業中もきめ細かな指導が可能だ。更に、結果は学校全体で共有する。文字の書き方(丁寧か)、取り組む姿勢(解答への努力の跡が見られるか、途中で投げ出しているか)などの点から、生徒指導面での課題も把握できるからだ。

■小中連携で授業改善に取り組み

入学前算数テストを機に、小中連携が深まった。「分数」「異なる2量の割合」のうち、難易度がより高く、日常生活にも必要な「異なる2量の割合」をしっかり身に付けさせようと、08年度に「中学生による小学生

のための割合講座」を発足させ、中学校の生徒が小学校に出向き、小学生に教えるという活動を始めた。生徒は小学生への指導によって理解を深め、小学生は先輩から教わることで学習意欲を高められる。

また、小学校では分数と割合を重視した授業を行うようになったほか、小中の授業交流も行われるなど、校区ぐるみで学力向上を目指す機運が高まっている。

図 「入学前算数テスト」(抜粋)



問題は毎年ほぼ同じ。ただ、「10%を分数で表す」という問題を次の年に「10%を小数で表す」程度の変更は加える



上記のシートは、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトから加工可能な形式でダウンロードできます。

<http://view21.jp/c011/>

学力下位層を伸ばす3か年のストーリー

2 単元ごとにコースを選ぶ「希望制習熟度別少人数授業」を実施

■習熟度に応じた2つのコース

同校では以前、習熟度によらず、単純にクラスを2分割した「ハーフサイズ授業」を行っていた。一斉授業よりも落ち着いた授業が来ていたが、学力向上には目立った成果が得られなかった。

そこで、08年度からは実施時期を1年生にすると共に、「希望制習熟度別方式」に改めた。教科書をじっくり理解・定着させる「じっくりコース」と、教科書のほか、さまざまな問題に取り組み「充実コース」のいずれかを、単元ごとに生徒本人に選択させる。単元の最

初の1時間は一斉授業を行い、チーム・ティーチングで単元内容を説明し、その後、生徒は自分が学びたいコースを選択する。

「1年生で基礎学力の定着を図ることで、いわゆる中1ギャップ、ひいては学力差の拡大を防ぐのが目的です」（大龍校長）

■希望を尊重して学習意欲を養う

それぞれのコースには人数制限を設けていない。本人の希望を尊重し、「コースを変わりたい」と希望した場合、単元の変わり目で見直しができる。希望制としたのは、「自分で選んだからにはしっかりとやる」という学習意欲

を持たせるためだ。

「教師が『じっくりコース』がふさわしいと思う生徒でも、本人が『充実コース』を選ぶことがあります。教師から特別に働きかけて、コースを変更するよう勧めることはしません。常に目を配るようにして、本人のやる気を維持させることを一番に考えています」（伊藤先生）

希望制習熟度別授業への生徒の満足度は高い。通常の一斉授業の中でも発言や質問が活発になるなど、学習意欲の向上にも効果が見られている。

3 補習や土曜日の活用、宿題の週単位化

■「放課後学習」で学習方法を指導し、定着させる

1年生の指導を見直す一方、3年間を通して次のような活動にも力を入れている。

まず、家庭で自主学習が出来ない生徒を中心に声を掛け、希望を募って「放課後学習」を行っている。学習内容はその日の宿題や授業の振り返りで、県・市から派遣された学力向上の指導補助員や教師が指導に入る。1年生1学期では10人程度が集まる。部活動が本格化する2学期以降は参加人数が減るが、3年生でクラブを引退すると希望者は定員の20人を超えるため、必要度の高い生徒を選んで

取り組ませている。

■「土曜チャレンジスクール」事業

「土曜チャレンジスクール」事業は、尼崎市教育委員会が市内中学校で実施する取り組みだ。各学年1クラスで、毎週土曜日に実施。学年ごとに授業の復習や宿題など、自分の課題に取り組み。同校を卒業した大学生、教員経験者などが指導に入る。

全校から希望者を募るが、必要な生徒には担任が声をかける。学習方法を指導するなど、家庭学習をするきっかけともなっている。

■「ウィークリーワーク」で宿題の時間を確保

生徒によっては、部活動や習いごと、その他の事情でどうしても宿題が出来ない日が生じる。そこで、3年生では「ウィークリーワーク」として週単位の宿題を課し、生徒の都合の良い日・時間に取り組めるようにした。内容は、これまでに習ったこと。1週間あたり2教科の復習プリントを宿題として週の初めに出し、金曜日の朝、その週のプリントから抜粋した問題による小テストを実施する。「このテストの結果を成績に反映させる」とあらかじめ生徒に伝え、自学自習を促している。